



2022年7月 第20巻 第7号

かく語りき—聖人の言葉

アルジュナよ、義務を忠実に遂行せよ。
そして成功と失敗とに関するあらゆる
執着を捨てよ。このような心の平静さ
をヨーガというのだ。

…シュリー・クリシュナ

年をとればとるほど、全てのことは男
らしさによって決まる、と私には思え
るのだ。これは私の新たな信条である。
…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・お知らせ
- ・2022年8月、9月の生誕日
- ・2022年6月12（日） スワミー・
ヴィヴェーカーナンダ 第159回生誕
記念祝賀会講演
「スワミー・ヴィヴェーカーナンダ
の理想の社会」
慶応義塾大学教授 谷口智彦博士
- ・京都知恩院リトリートのレポート

レオナルド・アルヴァレス

- ・知恩院リトリート・スケジュール
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

お知らせ

英語のニュースレターを20年以上担当
なさったロニー・ハーシュさんが健康
上の理由で退任されました。長きにわ
たり愛情を込めて美しいニュースレタ
ーを皆さんに届けて下さりありがとう
ございました。 ロニーさんの幸福と
健康回復のために皆でシュリー・ラー
マクリシュナとホーリー・マザー・シ
ュリー・サーラダー・デーヴィーに祈
りましょう。新しい担当者はアシシ
ュ・グプタさんです。

（※日本語のニュースレターは英語版
をもとに作成しております）

コロナ禍が形を変えてまだ続いており
ます。混雑を避けるため、プログラム
参加を希望される方はヴェーダーンタ
協会にご連絡ください。

マスク着用、ソーシャルディスタンス
等ご協力をお願いいたします。

日本ヴェーダーンタ協会 会長スワ
ミー・メーダサーナンダ

今月の予定

2022年8月、9月の生誕日

8月の生誕日

スワミー・ニランジャナーナンダ

8月12日（金）

シュリー・クリシュナ・ジャンマシュ
タミ 8月18日（木）

スワミー・アドヴァイターナンダ

8月26日（金）

9月の生誕日

スワミー・アベダーナンダ

9月19日（月）

スワミー・アカンダーナンダ

9月25日（日）

・日本ヴェーダーンタ協会の行事予定
はホームページをご確認ください。

<https://www.vedantajp.com/>

**2022年6月12日（日） スワミー・ヴ
ィヴェーカーナンダ 第159回生誕記
念祝賀会**

**「スワミー・ヴィヴェーカーナンダ
の理想の社会」**

谷口智彦博士

慶応義塾大学教授

スワミー・メーダサーナンダジー、

サンジェイ・クマール・ヴァルマ閣下
ヴェリヤト・シリル神父、皆様、これ
から「スワミー・ヴィヴェーカーナ
ンダの理想の社会」についてお話し
ます。



しばらく前になりますけれども、私は、
自分にできることだったらどんなこと
でも日印関係の増進に力を尽くす、と
いう誓いを立てました。安倍晋三氏は
首相時代に何度も「日印関係にもし
限界があるとすると、それは天、空
だけである」とおっしゃいました。つ
まり青天井であるということです。私
はこの目で安倍総理と一緒に二国間
の関係が発展するのを見ましたし、
新たな地政学的な概念としてのインド
太平洋の登場を見ましたし、さら
にはクワッド（日米豪印戦略対話）
が出現するのを眺めました。アメリ
カの元国務長官デイン・アチソンの
著書に『その場に居合わせた』とい
うものがございしますが、私はまさ
にそれでありまして、そのことはも
しかすると、なぜ私が日印関係を大
切に思うかということの説明

するものであるかもしれません。

一度、インドの持っている文化の豊かさ、伝統の豊饒さ、さらには宗教や精神文化の豊かさというものに触れますと、必ずといっていいでしょう、偉大な中でも偉大な人物に出会うことになります。その偉大な中でも偉大な人物というのが、スワミー・ヴィヴェーカーナンダであります。私もそのようにして出会うことになるのですが、その時は予定されていた安倍首相のインドへの訪問を前に、良いエピソードはないか、面白い物語はないか、急いで探していた時でありました。それは2007年に安倍首相が渡印し上下両院の議会で演説をするための準備をしていたときであります。

その時、安倍首相はかの偉大な精神的指導者に言及しながら、スピーチをこんなふうに始めています。『たとえ流れがどこに発してどんな場所を通ろうとも、その流れは一つの水になって海で交わる』、この言葉をもってスピーチを始めることができるのはこの上ない喜びであります」

只今申しましたのは、このようにしてスワミー・ヴィヴェーカーナンダをほんのちょっと理解するようになって、そのほんのちょっとの出会いというのが、スワミー・メーダサーナンダのお目に留まって、そして私に「しゃ

べれ」とおっしゃったわけです。そしてちょうど一年前、158回の生誕記念の日に話をいたしました。正直言ってこれだけであります。私はここで日本人らしく謙譲の美德を発揮しているわけではありません。今まで申しました二つの経験というものは、それをもってスワミー・ヴィヴェーカーナンダについて深い議論をできるような資格要件だとは思えないからであります。まるでゼロ×ゼロがいつまでたってもゼロであるようなものであります。

さて、いよいよスワミー・メーダサーナンダジーが与えてくださったこの挑戦に立ち向かわなくちゃいけません。その挑戦とは、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの理想的な社会について、つまり哲学的な問いについてしゃべる、ということでありまして、まあ我ながらよくここまで蛮勇をふるえるものだと思っています。

ヒンドゥ教の偉大な指導者であり、私共が今考えておりますこの人物は、1863年の1月12日に生まれているんですが、驚くべきことに、そのほとんど1月後の2月14日に岡倉天心も生まれております。岡倉こそはかのルネサンス型の人物でありますけれども、シスター・ニヴェディタと親交を結び、やがてスワミー・ヴィヴェーカーナンダを知ることとなる人物であります。岡倉は、目覚めた、覚醒の人物であり

ました。そしておそらく自分の国の文化的な、あるいは芸術的な遺産というものを鳥瞰的に眺めることができた、いや、もっと言うなら、人工衛星の軌道くらいの高さから眺めることができた人物であった、と言えるであります。その著作には、『東洋の理想』、『日本の覚醒』、『東洋の覚醒』、そして忘れてならないものとして『茶の本』があります。いずれも英語で出版されました。こういうタイトルをちょっと眺めるだけでも、この時代に初めて西側と比べて自分たちの国はどう違うのか、ということ、彼ら限られた少数のリーダーたちに深く考えさせたのだと思います。

ヴィヴェーカーナンダや岡倉が考えた考えは、それぞれ違うかもしれませんが、一つ共通のことがあったとするならば、「西側と比べて自分たちは」というときにその自分たちについて、全体的な、それぞれの国を全体として捉える、そういう目がなければならなかっただろう、ということでもあります。

この全体的に祖国を捉えるという視野、目の付けどころですね、これがあって初めて、この時代の知識人というものは自分たちそれぞれの社会について、理想とは何か、理想的な姿は何か、というものをつくることができたのだと思います。またその全体的な見方があって初めて、愛国的な気持ちというも

のをつくり出すこともできました。まあ、早い話が、北海道の人も沖縄の人もみんな日本人だというこの全体的なセンスがなければ、国民としての自覚というものも生まれなかったであります。

ですから驚くにはあたりませんが、この岡倉とヴィヴェーカーナンダが生まれた1860年代には、次のように次々と立派な人が生まれております。タゴール1861年、森鷗外1862年、イタリアの詩人のダナンシオ1863年、ドイツの社会学者ヴェーバー1864年、それからタゴールと親交を結ぶロマン・ロラン1866年、中国の革命家孫文1866年、夏目漱石1867年。そして忘れるべきでないのはマハートマ・ガンディー1869年であります。

こういった偉い人たちの中に、特に芸術や文化、文学で働いた人の中には、自分たちは、この一体として感じられることもあるこの自分たちは何者なんだ、という疑問が芽生えたわけがあります。つまり、我々の国はどんな国なのか、どんな国民なのか、日本人とは誰で、インド人とはどういう人間で、ダナンシオの場合であればイタリア人とはどんな人間なのか、という問いです。そしてこの問いから、はじめて社会に対するオーナーシップのセンス、自分たちの社会だというセンス、それからこれをまわしていこう、切りまわ

していこう、ということについての責任感、さらには社会を導いていこうというときの義務感が生まれるのだと思います。私の考えでは、スワミー・ヴィヴェーカーナンダほどこの時代の雰囲気というもの、時代のセンスというものをよく体現していた人はいません。

歴史上はじめて社会は、神様が作ってくれた自然にそこにあるようなものである、ということをやめてしまいました。それまで社会というものは、地球と同じようにずっとそこにある、ところものでした。ですからそういうふうに見ている間は、社会は、改造したり、壊したりする対象と見ることはできなかったわけですが、もうそうはいかなくなりました。そしてこんな自覚に至ろうと思うならば、まず、いろいろな文化や国境を越えたほうがいいに決まっています。

去年はちょうどこの場でスワミー・ヴィヴェーカーナンダのことをスワミー・メーダサーナンダがお書きになったインドと日本の関係についての素晴らしい本『スワミー・ヴィヴェーカーナンダと岡倉天心、現在のパイオニア』について話しました。その本の中でスワミー・メーダサーナンダは、シカゴに行く途中でスワミー・ヴィヴェーカーナンダが日本に立ち寄った時のことについて詳細を追っ

ておられます。

アメリカに渡ったスワミー・ヴィヴェーカーナンダは、もちろんヒンドゥの教えをキリスト教徒の人たちに広めた、中でもヴェーダーンタの教えを広めたわけですが、このように旅しているうちに必然的に彼の中に一種の社会エンジニアとしての自我というものが育まれたのだと思います。まずは、その社会というものを、全体として、一体として眺める。社会とは改造できる何者かである、とみる。そして理想的な社会を実現しようと思うならば、長い視野を持つ必要がある。こういう考えを彼は発達させたんだと思います。

ここで思い出すのは、19世紀から20世紀にかけては、理想的な社会に近い社会どころか、成熟した民主主義を持っている国もどこにもありませんでした。アメリカでは黒人たちは差別されていましたし、イギリスの富というものは、植民地からの搾取によって——インドがその代表例ですが、——実現されたものだし、ベルギーは国王レオポルド二世のもと、史上最も残酷といってもいい植民地統治に乗り出そうとしていた、まさにそんな時でした。

もしもスワミー・ヴィヴェーカーナンダが西洋社会を見てその不統一ですとか、不調和、差別とか不平等についてなにか書き残したものがあ

えていただきたいと思いますが、ここではひとまずこのようにスワミー・ヴィヴェーカーナンダのように、ゴッド、神というものが遍在するんだ、という考えを持っている人、そして全ての人々が平等で同じなんだ、という考えを持っている人物にとっては、西側社会で見たものというのはおそらく反面教師であったでしょう。というのも彼がシカゴで大変有名になったスピーチを「シスターズ アンド ブラザーズ オブ アメリカ」と始めたときに、彼は人類最初の男女平等主義者になったといってもいいかもしれません。フンボルト大学のヒルトウルード・リュスタウ (Hiltrud Rüstau) という研究者によれば、この時のシカゴでのあいさつは、人類の平等、それは国籍や宗教や性や肌の色は全く関係ないんだ、と言っているそうです。しかも植民地の国からやってきたこの人物には、あふれんばかりの誇りと自信があった。彼の国は貧しいし、飢えてもいるかもしれないけれども、それでも彼には世界に向かって素晴らしいものを提供できるんだという自信があったのであります。こんなふうな巨人を持っていたインド人は幸いなるかな、と私は申します。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダはこう言いました。もっとも偉大な社会とは、もっとも崇高な真実というものが実践される社会である。理想的な社

会では、いかなる意味での力に基づく特権というものも存在する余地がない。富に基づく特権だとか、知識に基づく特権というものの存在する余地もない。いかなる意味での特権というものも理想的な社会に対する否定である。

民主主義についてもヴィヴェーカーナンダは語っていてそれも、「全ての人々は平等である。全ての人の中に神が宿っている」という信念に由来するもので、どの個人も誰も自分というものを発達させる権利がある、全ての違いというものはやがて取り下げられるのであって、弱い人や、抑圧されている人や、搾取されている人というものがちゃんと力を持つという、それが民主主義なんだ、と彼はこう言っているわけですね。

ヴィヴェーカーナンダは、あらゆる人間は一つである、神はすべての生き物に遍在する、と言っていますが、これは我々日本人にとってよくわかる考え方じゃありませんか？ 今でも私たちは亡くなった両親や姉や兄弟やさらには叔父や叔母が草葉の陰で見ている、というじゃありませんか。ここにも精神面でのインドと日本の共通性、というものを見るわけでありませう。

ここで彼が考えた理想の社会とはどういうものかをもうちょっと細かく見てみましょう。スワミー・ヴィヴェー

カーナンダは言います。「理想的な社会というものは、特権というものがなく、それぞれの人間が利己的にふるまわない、そういう社会だ。そこにおいて思想や行動の自由というものは保証されていて、まさにそれこそが人生の前提条件でなければならない。もしそれがなければ人間も人種もグループもさらには国家も落ちていくしかないであろう」。

じゃあその自由とは何か。「それは自分の身体、心、財産を自分の意志に沿って使うことができる力であり、同時に人を傷つけない、ということである。全ての社会の全ての成員メンバーは、教育を受ける権利も富を蓄える権利も授かっている。もしこれが現在社会において、一部の富を独占する人たちによって損なわれているのだとしたら、それは大変恥ずべきことである」、まあこういうことを言っているわけですね。

ドイツの哲学者が引用しているスワミー・ヴィヴェーカーナンダの言葉が続きますけれども、晩年になるとスワミー・ヴィヴェーカーナンダは特に働く人びとのことというものを考えて、彼らこそが社会の背骨（バックボーン）なんだ、と言ったそうです。例えばそこらを掃除している人達ですね。もしその人たちが仕事をやめてしまうと、一日にして社会がパニックに陥ってしまう、そういう普通の人たちを中心に

して、社会を考えるべきだと、彼は言うようになりました。

ある社会というものの草創期にとりわけあらわれるのかもしれませんが、彼は、屹立する個人、そして非常に大きな心を持っていた人でした。その心というものはあまりにも大きいので、神の声を聞くこともでき、人びとの苦しみに怒ることができ、そして人びとの痛みというものを同じように痛烈に感じることもできたのだと思います。

インドでも、そのほかのどこの社会でも、社会的な平等というものを達成しようとするならば、それは一世代でどうにかなるものではありません。何世代もかかります。彼はこのことを誰よりも理解していたと思います。というのは、アメリカやフランスやイギリスで平等な社会というものは決して実現していない、ということをや西側の政治や経済、宗教活動などを見てよく分かっていたはずだからです。

では、最初の一歩は何なのか？ スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、それは「教育」だと言いました。

インドの当時とそれから日本の今とでは背景が全然違いますけれども、今の日本が成長するためにも、人びと、人というものにもっとお金を使わなければならない、ということは火を見るよ

りも明らかです。なぜなら人間こそが成長を生み出すことができるからです。特にこの技術的な発展の激しい世の中ではそう言えます。

次に、スワミー・ヴィヴェーカーナンダは教育について、「教育というものは、その人の内なる何かを育てるものだ。なぜなら全ての智識は人間の魂からくるからである。力というものは人々のうちに宿っている」と言っているらしいです。教育はすなわち人づくりであり、国づくりでもある。これは眠っている魂を呼び覚まし、活動へと促す経過なんだ、と言っているようです。スワミー・ヴィヴェーカーナンダはさらに続けて、「教育というものは人格を作り、心を強くし、知性を拡大するものである。そして人が自分の足で立てるようにすることだ。今、自分たちの国インドに必要なのは、ライオンの筋肉、鋼鉄の神経、そして何物にも惑わされない巨大な意志である」と言っているようですね。

このように、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの発言の断片を集めてみたに過ぎないのですが、もうこれだけでも恐らく日本の明治時代の偉大な教育者たち、例えば福沢諭吉も同じようなことを言っていたな、ということがお分かりでしょうし、啓蒙時代の指導者というものも同じように言っていたと思います。

現代に早送りしてみたとしても、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの人生、その行脚、インド中の行脚、さらには思想や燃えるような宗教に対するこのパッションというものは、依然として輝くビーコン、輝く炎でありまして、それはインドの人たちを目覚めさせ、また私たちに日本の者も目覚めさせることができると思います。

インドにスワミー・ヴィヴェーカーナンダという人物がいた。その広い心というのは人々の痛みや悩みというものを共にした。そしてあのシャイニングアイズがいつも我々を見ている。また、彼の思想というものがずっと我々の啓蒙の源となっている、というこの国インドは我々の尊敬敬意というものを集めるわけであります。

日本は安倍首相のもと、インドに近づけるような決断をいたしました。それはインドが持っている豊かな未来の成長に対する一種の投資でありまして、その未来の成長の力というものは、スワミー・ヴィヴェーカーナンダがあれほど大切に考えた教育によって支えられています。またインドに日本を近づけた、このおこないというものは、インドの未来の方向について信を置いている、信頼を置いている、ということでもありました。なぜなら、インドにはスワミー・ヴィヴェーカーナン

ダがいる。そして皆さんは依然として彼を深く尊敬している。終わりにあたって私も敬意を払う一人であると申し上げます。ありがとうございました。

※谷口先生の講演をほぼそのままの形で掲載させていただきました。

京都知恩院リトリート レオナルド・アルヴァレス

今年のリトリートは、法然上人が創立した日本最大級の仏教宗派である浄土宗の本部、京都の北東部にある知恩院で開催された。ここ知恩院は、法然上人が悟りを得るために阿弥陀様(サンスクリット語：Amitabha Buddha)の御名を唱えることを教え、この世を去られた場所でもある。

メーダサーナンダジー(以下、マハーラージ)とディッヴィヤーナターナンダジーは、7月8日の早朝に逗子の協会を出発し、昼食の少し前に新幹線で京都に到着し、そこで数名の信者に迎えられた。一緒に昼食をとった後、一行は祇園画廊を訪れ、そこで祭りの車「山鉾」を見学した後、近くの八坂神社に立ち寄った。他の参加者は「和順会館」という知恩院の宿泊施設に直接向かった。このホテルは5階建てで、斜面に位置し、白いファサードがある。1階からはガラス窓越しに有名な広々とした庭と寺院全体が見下ろせる。多くの受付

係は見習い僧で、毎朝午前4時50分に朝のお勤めの知らせがある。一行はホテルに着くと、無事にリトリートが成功しますように、と祈った。

14時40分から信者たちは、知恩院の僧侶の案内で、知恩院が誇るさまざまなお堂や寺を訪れた。一行は高さ25メートル、横幅50メートルの日本最大級の門である「三門」をくぐり抜け、「御影堂」へと進んだ。国法「御影堂」には、法然上人の御影をお祀りする厨子があり、その軒の先端部分は、仏像や菩薩像、木々や動物をモチーフにした木彫りが織り交ぜられた金の装飾が施されている。その後、「阿弥陀堂」、日本最大の鐘「大鐘楼(だいしょうろう)」などを見学し、最後に緑茶と和菓子をいただいた。

部屋に戻りしばらく休んだ後、18:00から集会室にて、シュリー・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ、浄土宗の創始者・法然上人の写真が祀られた美しい祭壇の前で夕拝が始まった。

ベンガル語とサンスクリット語の賛歌がディッヴィヤーナターナンダジー演奏のハーモニウムと音とともにホールを埋め尽くした。それから日本の信者が日本語の賛歌も歌った。つぎに『ラーマクリシュナの福音』の朗読が続いた。マハーラージは瞑想の重要性とその詳

細を説明の後、信者のために誘導瞑想をなされた。夕食は19時30分からで、夜の集会は20時30分に始まった。出席者全員が一緒に座って聖典を読み、自己紹介をした。この時マハーラージは、この夏期リトリートのような霊的リトリートの必要性和意義を説明なさり、ディッヴィヤーナターナンダジーは再び賛歌で皆を喜ばせた。皆がくつろいで賑やかな雰囲気だった。

安倍晋三元首相暗殺の衝撃的なニュースは、その時すでに届いていた。安倍元首相はインドとの密接な関係を築き、日本でのスワミーの生誕祝賀祭のサポートもなさっていたので、皆、立ち上がって亡くなった魂の幸福のために短い静かな祈りを捧げた。

翌7月9日の朝4:00、ほとんどの信者はロビーに集まり、寺院のある小さな山に面した、ホテルの近くの絵のような日本庭園のある公園(円山公園)へ、戸外瞑想をするために出発した。夜明けが間近に迫り、周りすべてが平和な静寂に包まれていた。一行は小さな池の前に座った。池には石灯籠で飾られた小さなコンクリート製の日本橋が架かっており、橋の向こう端はさほど遠くないのだが、無限の中に流れ込んでいるように見えた。瞑想マットを広げて瞑想するとき、マハーラージは「まず、目を開いたままで周りの景色を楽しんでください。目の前の山がまるで

ヒマラヤ山脈のようだと想像してみてください」と指示された。しばらくして、マハーラージは目を閉じるように指示し、続いて低い声で「オーム」が繰り返された。瞑想は、目の前の池で楽しそうに泳いでいる鯉がジャンプしたときの水のしぶきの音で時折破られるだけで、深い沈黙の中、1時間以上途切れることなく続いた。6時50分頃にホテルの集会所に戻った後、ヴェーダのマントラを唱え、サンスクリット語と日本語訳の両方で『バガヴァッド・ギーター』を朗読した。マハーラージは朗読した第6章の5~26節について説明された。コントロールされていない心は最悪の敵だが、コントロールされている心は最良の友である、というのが話の要点であった。「いかなるときにも私たちには、プレーヤ(楽しいが、長い目で見ると破滅的なもの)と、シュレーヤ(初めは難しいが私たちを自制心と成長の道へと導いてくれるもの)という二つの選択肢があります。どちらを選ぶか決めるのはあなた自身です。私たちは、ガラスで守られていて風の影響を受けない安定した炎のように、心を静止させなければなりません。そうして初めて、心をコントロールできるようになるのです」。マハーラージの説明の後、ディッヴィヤーナターナンダジーの先導でスワミーのサンスクリット語の賛歌「ムルタマヘシュヴァラ」を全員で歌った。

7:00 から約 12 人の信者がヨーガ実修のために、早朝瞑想をした場所の近くに集まった。他の信者たちは、自分のために時間を使った。朝食は 8:15 からで、和洋食だった。09:45 より、マハーラージによる「さまざまな災難に立ち向かう方法、平安を得て霊的生活を送る方法～インド哲学の視点より～」の講話（前半）が始まり、正午まで続いた。この日の講話は、万能で理想的な人格を持つためには、I. Q. (知能指数)、W. Q. (叡智指数)、E. Q. (感情指数)、M. Q. (道徳指数)、S. Q. (霊的指数) という 5 つの面で成長する必要があるという事実を強調することから始まった。次のポイントは、人生における困難や試練は歓迎すべきである、なぜなら、困難や試練に直面しなければ誰も偉大になれないからだ、ということであった。「スワージー・ヴィヴェーカーナンダ、マハートマ・ガンディー、エイブラハム・リンカーンといった歴史上の偉大な人物は皆、多くの苦難に果敢に立ち向かい、乗り越えました。さらに、スワージーは、『私たちの中には無限の力が眠っているが、私たちはそれを目覚めさせ、それを使わなければならない』と強調されました。これは、トラブルから逃れることによってではなく、大胆に向き合うことによってなされます。私たちは神に助けを求めて叫びますが、神は既に私たち自身を助ける力を与えてくださっているのです、神は助けません。私たちが神から与え

られた全ての力を使い果たしたときのみ、神は助けてくださいます」「私たちのもう一つの問題は、長年にわたって霊的な道を歩み、瞑想を実践しているにもかかわらず、あまり変わらないということです。それはなぜでしょうか？」 マハーラージは、まずこの最も核心を突く質問をなされた。それからマハーラージは「ほとんどの場合、私たちは本当は自分を変えたくないので、私たちの内には何の変化も起こらない、ということではないでしょうか」とおっしゃった。

正午には、シュリー・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー、スワージー・ヴィヴェーカーナンダ、法然上人に供え物が捧げられ、12 時 15 分から昼食の際に、そのお下がりいただいた。その後、集合写真が撮影され、田島さんや増田夫妻ら信者がヴェーダーンタの本、CD、宗教用品などを熱心に販売した。

短い休憩の後、知恩院の前田昌信執事が「法然上人の教えとそれを私たちの日常生活の中で実践する方法」と題した講話をされた。次に、マハーラージによる短い話が続いた。その内容は、私たちは信者であるが、まだ多くの試練と苦難に直面しなければならないという事実についてであった。マハーラージは、シュリー・ラーマクリシュナ、

ホーリー・マザー、スワームジーから愛情を込めて「バヴィ」と呼ばれたバヴァターリニの例を引用された。バヴァターリニは幼い頃から彼らに育てられ、神を非常に愛し、もとは非常に貧しかった夫のウペンドラ・バーブでさえ、シュリー・ラーマクリシュナの恩寵で富を得たにもかかわらず、彼女は数年後には、夫、一人息子、唯一の孫、を相次いで亡くした。彼女はものすごいショックと死別に耐えられず、こっそりと家を出て、巡礼の地で発見された。後に彼女はベナレスに住み、そのラーマクリシュナ僧院の僧侶の世話を受けながら、厳しい苦行(タパスヤ)を実践した。そしてシュリー・ラーマクリシュナとホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーのことを常に想っていた。神による信者への究極の試験は、その信者がすべての人とすべてのものを失った後でさえ、その信者が「主よ、あなたは私の唯一の避難所、あなたは私の唯一の伴侶です」と言えるか、ということだ。

17時15分頃、雨が止んだので、信者たちはマハーラージとともに、前日の朝に瞑想をした庭園に散歩に出かけた。その道中、ある信者がタントラと瞑想についてマハーラージに質問した。また、マハーラージは木のそばで休んでいるおとなしい猫を撫でたりもされた。そのあたりを一周した後、池に戻り、そこで色とりどりの鯉にクラッカーを

与えると、鯉が群れをなしてやってきた。また、そこで出会った京都の大学でITを専攻するネパール人学生のグループは、マハーラージと短い挨拶を交わした。

夜の礼拝は18:00に始まり、通常の夕拝の時の賛歌を歌い、『シュリー・ラーマクリシュナの福音』を読み、瞑想した。夕食は19時30分からで、いつものように豪華な日本料理だった。

20時30分から21時30分まで二回目の夜の集まりがあり、主に賛歌を歌った。まず、レオナルド・アルヴァレスさんがエルサレムについてのユダヤ人の歌を歌った。その後、主催者の一人である鈴木敦さんが、マハーラージの計画をいかに細心の注意を払って行ったかを語った。それは昨年12月の出来事で、マハーラージが3年ぶりに大阪で講話をするので、信者のグループと新幹線で大阪に向かっていたときに、敦さんが変装して同じ新幹線に乗り込んだ話であった。ニット帽と分厚い眼鏡で正体を隠し、ほとんどの時間を雑誌で顔を覆い、マハーラージ以外の誰にもバレることなく、信者のグループの隣の席に座っていたのだ。挙動不審な乗客に気づいた信者もいたが、誰もその人が敦さんだとは気づかなかった。信者のグループは彼がずっと新幹線の隣席にいたことを大阪の講話会場についてから知って驚いた。彼の話は大いに受

けて部屋に笑い声が響いた。

続いて、日本人参加者が、田舎の典型的な日本の村の美しさと純粋さを讃える日本の民謡「ふるさと」をまるやかな声で合唱した。

その後、マハーラージとディッヴィヤーナターナンダ・マハーラージが、ディッヴィヤーナターナンダジーのハーモニウムの伴奏に合わせて、後にバングラデシュの国歌となった詩人ラビンドラナート・タゴール作詞のベンガル民謡「アマル・ソナー・バングラ」(私の非常に美しいベンガル)を、情感を込めてメロディアスに大きな声で歌われた。

リトリートの最終日、日曜日7月10日は、5:00から集会室での瞑想で始まった。前日と同様に、ヴェーダのマントラ詠唱とギター朗誦の後、マハーラージはその時読んだ第2章の節について説明された。(1)身体、心、知性、自我はすべて物質的で、プラクリティの一部なので、死んだ物質のように不活性である。意識だけが生きている。(2)アートマンは剣で切り刻むことができず、水で溶かすことも、火で焼くこともできない。アートマンは不滅である。(3)私たちが苦しむのは、私たちが自分の身体意識に基づいて他者との関係を確立し、それが執着につながり、最後には苦となるからだ。(4)私たちは常に、真に幸せになり、霊性に基づいた他者との関係を確立するために、その本質

がサット・チット・アーナンダ、絶対の存在・絶対の意識・絶対の至福であるアートマンと自分自身を同一視するべきだ。

7:00からは再びヨーガのクラスが開催され、朝食へと続いた。それからマハーラージの講話の後半が9時45分から始まった。前日、マハーラージは、仕事、人間関係、恐怖、執着、欲望、否定的な思考、一時的なことを考えること、未来を心配し過去について考えること、変わりたくないこと、を含む9つの主要な例を挙げられた。この日は5つの質問をもって、真の知性の基準を示された。まず、最も美しい人は誰か? 答え「その性質が最も美しい人」。最も裕福な人は誰か? 答え「欲望のない人」。誰が最強の人物か? 答え「自分の感覚と心をコントロールした人」。世界最速のものは何か? 答え「心」。そして最後に、世界で最も多いものは何か? 答え「思考」。

日常生活における課題について、次のような解決策を説明された。**仕事について**：私たちは神の道具としてカルマ・ヨーガの精神で仕事を行い、自らの働きを神に捧げ、仕事の前にも、最中にも、後にも神を思い出し、仕事の結果は神にお任せし、最後に成功にも失敗にも圧倒されないようにすべきである。**人間関係について**：私たちは自分のエゴを減らし、すべての人々の中

に神を見て、彼らの良い性質を見て、彼らの欠点を大目に見なければならぬ。繰り返しになるが、最も近い人間関係でさえ、いつかは終わる。心のコントロールについて：私たちは自分自身を征服し、平安を得なければならない。それには、長きにわたる実践、感覚のコントロール、瞑想、一時的なものとの識別、理想的な生活のスケジュールを立てて、それに従い、今をよく生きること、心配や後悔することをやめること。執着と利己心を減らすために：自分自身や家族や友人という限られた輪を気遣うだけでなく、周りのあらゆるものとの関係を神聖化し、他者の幸福と他者への奉仕について考えなければならない。欲望のコントロールについて：欲望を満足させてはならない。なぜならその行為は火に油を注ぐようなものだからだ。また、貪欲をコントロールし満足の実践をしなければならない。ポジティブな態度を持つには：他者に善を見だし、永遠なるものを思い、常に神を思い起こすこと。恐れや心配事、ストレスを克服するには：恐れや心配事のほとんどは起こらないことを覚えておき、もっと神に頼る。

最後に世俗的(タマスの的でラジャスの)な人から靈的(サットワ的)な人へと変貌する方法について：スワミー・ブラフマーナンダジーが説明されているように、最も簡単な方法、サハジャ・

ヨーガとは、心で神の御名を繰り返すことだ。それは、自制と道徳的实践が不可欠なギャーナ・ヨーガやラージャ・ヨーガの実践のように長い準備を必要とせず、カルマ・ヨーガのように体力や無私無欲が必要なわけでもなく、時間や場所、状況に制限されない。心で神の御名を唱えることには11の利点がある。(1)否定的な考えに対抗する(プラティパクシャ・バーヴァナ)。(2)否定的な考えが出てくるのを防ぐ。予防は治療法よりも優れている。(3)神の御名の聖なる波動はサットワを増大させ、ラジャスとタマスを減少させる。(4)深く根ざしたネガティブなサムスカーラを浄化する。(5)この世と別の世(複数)の悪いカルマの結果を無効にする。(6)神への愛と信仰が増す。(7)独りぼっちのときに良い仲間といるように感じる助けとなる。(8)瞑想中に私たちの心を神から遠ざける世俗的なことを考える時間を減らすことで、瞑想中の集中を助ける。(9)仕事をより良く遂行するのを助ける。(10)死の瞬間に神について考えるのを助けてくれる。(11)超越的な至福を味わわせることによって、私たちが幸せになるのを助ける。

講話は、質疑応答と初参加の方々のコメントで締めくくられた。主催者である鈴木敦さん、泉田さん、リトリートの企画・運営に協力してくださったボランティア、寺院当局、ホテルスタッ

フに感謝の意が述べられた。そしてリトリートは、次のヴェーダの平和の祈りで終わった：

オーム プールナマダ プールナミ
ダム プールナート プールナムダッ
チャテ

プールナッシャ プールナマダー
ヤ プールナメーヴァーヴァシッシャ
テ

オーム シャンティ シャンティ
シャンティ

この後、ほとんどの信者が帰路についていたが、お二人のスワミーに加えて、信者の小さなグループは、観光のために京都にもう一泊した。その日の夕方、嵐山を背に流れる桂川に向かい、夕暮れの日差しを浴びながら川のほとりで瞑想した。爽やかな風が涼しく、川向こうの漁師や川を渡る屋形船の姿を眺めながらの瞑想となった。ホテルで一夜を過ごした後、一行は7月11日午前8時に出発し、金閣寺に向かい、寺院周辺を散策した後、平安時代の古い中国宮殿様式の19世紀末に造営された平安神宮を訪れた。続いて、高台から京都の美しい街並みを眺められることで有名な清水寺を訪れた。その後、一行は12世紀から13世紀にかけて完成した仏教寺院である三十三間堂に向かった。長大なお堂には、人物大の1001体の千手観音立像が安置されている。外の灼熱とは対照的に、堂内は涼しく、マハ

ーラージはそこに安置された仏像とさまざまなインドの神々・女神との関係について信者に説明された。それから、信者は像の前でしばらく瞑想した。逗子の協会に戻る途中、一行は昼食のために本格的な中華料理店に立ち寄った。そして帰る道中は疲れも知らず楽しく会話が続いた。

すべてのプログラムと旅行は、シュリー・ラーマクリシュナとホーリー・マザーの恩寵で、スムーズかつ楽しいものであった。

2022年戸外リトリート・スケジュール

7月8日（金）～11日（月）

07:40 協会出発

08:01 逗子駅出発

09:10 品川駅出発（ひかり505号）

11:37 京都駅到着

12:00 レストランにて昼食

13:40 協会の車でホテルに向かう

13:50 ホテルにチェックイン

14:40 巡礼

16:10 休憩とお茶（集会所）

18:00 夕拝、スワミー・ディッヴィヤーナターナンダによる賛歌

19:30 夕食

20:30 サットサンガ

21:30 一日目終了

9日（土）

04:50 ホテルから出発

05:00 戸外瞑想
 06:00 ヴェーダの祈りとギター
 賛歌：スワーミー・
 ディッヴィヤーナターナンダ
 07:00 ヨーガ
 08:15 朝食
 09:45 講話 スワーミー・
 メーダサーナンダ
 12:00 供物奉獻
 12:15 昼食
 14:30 知恩院前田昌信執事
 「法然上人の教えと
 日常生活の中で実践する方法」
 15:45 散歩とお茶
 18:00 夕拝 賛歌 スワーミー・
 ディッヴィヤーナターナンダ
 泉田シャンティ、瞑想
 19:30 夕食
 20:30 サットサンガ
 21:30 二日目終了

10日(日)

05:00 集会所で瞑想
 06:00 ヴェーダの祈りとギター、
 賛歌：スワーミー・
 ディッヴィヤーナターナンダ
 07:00 ヨーガ
 08:15 朝食
 09:45 講話：スワーミー・
 メーダサーナンダ
 12:00 供物奉獻
 12:15 昼食
 14:00 質疑応答と感想
 15:30 終了、掃除

19:30 別のレストランで夕食
 21:00 三日目 終了

11日(月)

07:00 朝食
 08:00 チェックアウト
 嵐山周辺観光
 12:00 昼食
 13:30 京都出発
 23:30 協会到着







忘れられない物語

「おお、そうか」

白隠禅師は 17 世紀後半から 18 世紀初頭にかけての人物だ。今では有名な「両掌（りょうしょう）打って音声（おんじょう）あり、片手に何の音声かある」という質問を世に送ったと言われてい

る。白隠禅師は、日常生活での行動から生じる理解は、僧院での実践から得られる理解よりも深いので、僧侶はしっかりと精進する必要がある、と信じていた。なぜなら家住者は僧侶よりも多くの心の混乱に直面し、より多くの責任を負い、より多くの悲痛を経験するからだ。

白隠禅師は深く尊敬され、多くの弟子がいた。彼がある集落の庵で暮らしていた時、近くに夫婦とその若い娘が経営する食料品店があった。ある日、両親は娘が身ごもっていることに気付いた。怒り取り乱した両親は、誰が子供の父親かを娘に問いただした。初めのうち、娘は相手の名を言わなかったが、両親の執拗な質問攻めに、「白隠禅師です」と答えた。激怒した両親は白隠禅師のもとへ行き、弟子全員の前で彼を罵倒した。彼はただ「おお、そうか」と答えただけであった。

赤ん坊が生まれると、その家族は赤ん坊を白隠に押し付けた。その頃には彼の評判は地に落ち、弟子は去っていった。しかし、白隠禅師は動揺しなかった。彼は喜んで赤ん坊の世話をしたのである。彼は村人から乳（ちち）や、赤ん坊に必要なものをもらうことができた。1年後、赤ん坊の若い母親は大きな後悔に悩まされ、両親に真実を告白した - 本当の父親は白隠禅師ではなく、地元の魚市場で働いている若い男

性だったのだ。心を痛めた両親は白隠禅師のところへ行き、「申し訳ございませんでした。どうか私共の過ちをお許してください」と言った。それから白隠禅師に赤ん坊を返してください、と頼んだ。白隠禅師は赤ん坊を我が子のように愛していたが、文句も言わずに喜んで赤ん坊を返した。

彼が言ったことは「おお、そうか」だけであった。

今月の思想

私が出会う人は皆、どこかしら私より優れている。だから私は皆から学ぶ。
…デール・カーネギー

発行：日本ヴェーダータ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp